

# 手足の不自由な子どもたち

平成30年度/No.380

# はげみ 6/7

June—July



特集

## 視線入力でらくらくコミュニケーション2 ～視線入力装置を使いこなす～



第36回肢体不自由児・者の美術展入賞作品「そうじをするわたし」

鈴木 琴実(9歳)

# はげみ

平成30年度  
6・7月号

はげみ通巻380号



## 目次

広場	広がる視線入力を活用	金森 克浩	2
特集	視線入力であらゆるコミュニケーション2～視線入力装置を使いこなす～		
解説1	視線入力装置入門2～古くて新しい身体拡張のアプローチ～	伊藤 史人	4
解説2	視線入力機器を使ったシンプルテクノロジー2	大杉 成喜／岡元 雅	23
事例1	フィードバックを大切にした視線入力装置の活用	福島 勇	32
事例2	重度重複障害児のためのローコストでない視線入力装置の活用	谷本 式慶	38
事例3	私の視線入力装置活用	八垣圭一郎	43
	視線入力装置活用事例	廣田 愛	45
事例4	さまざまな支援機器を活用する中での視線入力装置	橋本 紗貴	48
事例5	視線入力未来を切り開こう！	三保浩一郎	53
事例6	視線入力装置の理解と機器の選定	伊藤 直弥	57
事例7	miyasuku EyeConシリーズ開発秘話	中島 勝幸	62
事例8	「Hearty Ai (ハーティー・アイ)」を作って	吉村 隆樹	71
事例9	国立病院機構新潟病院における視線入力装置の導入と活用事例	早川 竜生	75
	今号の表紙	鈴木 琴実	80



# 広がる視線入力 の活用

日本福祉大学スポーツ科学部 教授

金 森 克 浩

講習会を開きました。これも、定員を上回る参加希望者があり、たくさんの方が熱心に参加されていました。さて、「このような状況の要因は何か？」 私なりの分析では次の3点が挙げられると考えています。

**その1「これまでの入力方法では思ったような意思を出せない人がいた」**

平成29年6/7月号特集「視線入力でらくらくコミュニケーション」は、これまでにない販売部数だったとのこと。本誌は、一般の書店には置かれていません。購入するには、直接日本肢体不自由児協会（以下、当協会）に問い合わせをするようになっています。それでも手に入れてみたいという読者がいたことです。前号が発行された直後に、全国特別支援学校肢体不自由教育校長会の田村会長から次のようなお褒めの言葉をもらったそうです。「先ほど、はげみ6/7月号を受領し、読ませていただきました。明るい表紙に相まって、特集の内容の濃さに驚きました。視線入力装置の最新の現状や導入のヒント。極めて具体的で実践的で素晴らしい特集だと感じました。絞り込んだテーマ、この内容に関しては、日本国内での最新情報が集結した冊子です。編集の皆さん、執筆協力の皆様に感謝です。さまざまな会で紹介していきます」。視線入力と言うのはそれほど肢体不自由のある子どもたちのニーズに合致していたのでしょうか。

また、それを受けて平成30年3月に視線入力に特化した

肢体不自由のある人にとって、自分の意思を表現する方法としてコンピュータはとても有効です。先日亡くなったホーキング博士に代表されるように、十分に自分の意思を表明できれば一般の人と同じ、またはそれ以上の仕事ができます。しかし、そうなるためにはその人に合ったコンピュータの入力方法が必要です。しかし、身体的な麻痺が大きければ大きいほど、適合技術は難しくなります。この視線入力の装置の場合は、その部分の敷居が比較的低かったのではないかと考えられます。前号にも書きましたが、「目力（めぢから）のある子ども」と言うのはとてもたくさんいました。そういった子どもたちのニーズに応えられるも



のがやっと出てきたのでしょうか。

## その2 「比較的安価に視線入力装置が手に入るようになった」

前述のようなことがあっても、視線入力装置が数百万円するとなれば、おいそれとは購入することはできません。しかし、ローコストな視線入力装置が購入できるようになってきました。そうすることで、「まずは試してみよう」ということが可能になりました。そう言った裾野が広がることで利用者が増えてきたのだと思います。ただし、ここには気をつけたいといけない面が2つあります。

1つ目は、高価なものが必要ないかというところではないことです。安価なものではそれゆえにサポートする側の技術量が求められます。高額なものは、機器だけではなく利用するソフトウェアも使いやすくなっていますし、業者のサポート体制も万全です。何でも安ければ良いというわけではありません。その意味では、安価なものを導入して利用できることがわかったら、サポートのしっかりした製品に移行することも考えておく必要があります。

2つ目は、安価に手に入るからと考えてすぐに障害のある人に使ってはいけないことです。視線入力装置のニーズがある人というのは、逆に考えるとそれまでの別の方法が十分に利用できなかったからこそこれにたどり着いている場合が多いです。だとすると、安易に導入することで上手く使えず、諦めてしまってもったいないのです。そのためには、サポートする人たちが十分にその使い方を勉強してから当事者に使ってもらうことが大切です。

## その3 「島根大学の伊藤史人さんの功績」

本特集では、島根大学の伊藤史人さんにたくさんのペー지를使い原稿を書いていただきました。伊藤さんはニーズのある人がいれば、直接その人の所まで行って実践をし、その効果と課題を多くの人に発信してきました。伊藤さんのその熱意は、多くの当事者や関わる人を動かしてきました。左の写真はその成果として平成29年11月に島根県で開かれたシンポジウムの様子です。

私は、この3点が相まって視線入力装置が普及したと思っています。前号にもまして本誌は皆さんの期待に応えるような内容になっています。ぜひ、この本を参考に多くのニーズのある人がコミュニケーションの環境を広げてくださることを願っています。



シンポジウム（島根県）